第３回輪島塗の若手人材の養成施設の整備等に関する基本構想策定委員会
議事概要

１　日　　時　　令和７年８月２０日（水）１３：００～１４：１５
２　場　　所　　能登空港ターミナルビル４階　４２・４３会議室
３　出席委員　　名簿参照
４　議事概要
（１）説明事項
　　事務局から資料に基づき説明
　　〔輪島塗の若手人材の養成施設の整備等に関する基本構想（最終案）等〕
（２）意見交換

○　今回の委員会をもって、基本構想が最終取りまとめとなり、今後、基本構想に基づき養成施設の基本設計等に着手することになるが、基本構想が着実に実行できるよう、輪島漆器商工業協同組合だけではなく輪島塗伝統工芸士会や輪島塗技術保存会、輪島漆芸技術研修所などの輪島塗の業界や関係者で一致団結して取り組んでいく必要がある。

○　基本構想としては上手くまとまったが、今後、カリキュラムなどの運営面をどうまとめていくかが、大きな課題になる。基本構想を踏まえ、輪島全体として取り組んでいくことが重要。

○　地元への魅力発信やプロジェクトの機運醸成など養成施設の整備を待たずに取り組むことで、次代の産地を担う人材の養成にもつなげていく必要がある。また、輪島塗の１２０を超える工程のうち、これまであまり光の当たってこなかった木地や下地といった工程の職人の姿を明確にすることで輪島塗の製作に様々な人が関わっていることを発信することも重要。当然、魅力発信にあわせて海外市場開拓の取り組みも重要であり、車の両輪としてしっかりと取り組んでいく必要がある。

○　基本構想では、マーケティングや海外展開といった新しい挑戦の要素を盛り込んだところに大きな意義がある。輪島塗は１２０を超える工程の分業体制があることが特色。この精緻な分業体制が輪島塗の真の強みになっていき、海外にも理解者を増やしていく方向を目指すべき。そのためには、漆芸技術研修所や輪島塗技術保存会といった基本の施設・組織と最適な相互支援関係を構築していくことが重要。

○　委員の皆様や、ワーキンググループでのきめ細かな議論、輪島塗関係者からの丁寧な意見聴取といったプロセスが重要だった。それを踏まえ「漆芸の聖地」を目指すという画期的なコンセプトが取りまとまった。これからは実行が重要であり、地元への魅力発信や海外市場開拓に向けた勉強会の開催など、できることから早期着手しなければならない。その際、「漆芸の聖地」の実現に向けて、地元は当然、国内外の幅広い関係者を巻き込んで取り組んでいく必要がある。

○　全国のいわゆる重要無形文化財は、いずれも保存・伝承に課題を抱えるところが多くなっており、そういう意味でも、今回のプロジェクトは、今後、他の重要無形文化財に展開されていくきっかけになるような意欲的なプランとなっている。

○　今後、ハード・ソフト面で設計のフェーズに入っていくが設計段階に入ると関係者も増えて細かな意見調整が必要となる。そのため、より丁寧にコミュニケーションをとっていくことが重要。また、例えばインバウンドを例に挙げると、その需要の取り込みも重要である一方で、ここにいる参加者だけで対応していくには、リソースが限られていることも事実。現在、能登の復興、あるいは多様な観点で、志を持った方々が様々なレベルで動いている中で、それを上手くつなげることで、文字通り総力を上げて取り組んでいく必要がある。

○　輪島市にとって輪島塗はなくてはならないアイデンティティである。この人材養成施設の整備を核として、輪島塗の震災からの復旧・復興の力強い光が見えてきた。全国の伝統工芸が少しずつ力を失っていきつつある中で、輪島塗の復興が良い事例となるよう関係者と力を合わせながら全力で取り組みたい。

○　文化庁でいう伝統的な技術の保存、それから経済産業省でいう産業振興、観光庁でいう文化観光、これを一気にやっていくべきだというこの構想は、我が国の伝統的工芸品に生き残っていく一つの道を示すプロジェクトではないか。

○　輪島という魂の部分を大事にすることが重要。例えば首都圏の百貨店での展示販売会など富裕層に対して、しっかりと輪島塗の本物の価値観を打ち込んでいけるような機会の創出も大事。

○ 今回のプロジェクトは、他の伝統工芸の産地からも期待を込めて注目されている。これで成果を上げていくと一つのモデルとなって各地にも波及していくということになれば意義深い。技術に加えて市場開拓をテーマに据えたことも大きい。キュレーターやコーディネーターのような、日本の伝統工芸に欠けていたかもしれない海外とのつなぎ役がここから育っていくとすると素晴らしい。そのような大きな可能性を秘めた基本構想になっている。

○ 文化観光の視点から、観光の世界も体験型にシフトしている。構想の中でここ輪島に体験型の施設を作ることが検討されている。作品を見るだけなら東京や京都で展示的に見ることができるが、体験をするとなると本場に人を呼び込むことに繋がる。

○ 運営体制のところについて、しっかりと地元を中心としつつも、全国の漆の産地や関係者とのネットワークの構築を図ることも重要な観点。石川県は日本有数の伝統工芸の産地であり、今後取り組む予定であるソフト事業の段階から、まずはそのようなネットワーク構築について取り組んでいく必要。

○ 輪島塗も他の全国の伝統工芸に漏れず、右肩下がりになってきた中で、自信をなくしつつある。若い人たちも輪島塗に対して魅力を感じなくなってきている。今回のプロジェクトによって、逆転現象が起きてくるのではないかと非常に期待している。

○ 県立美術館において、この熱くなっている機運をさらに醸成するため、来年度は輪島塗の魅力を発信する特別展を企画している。

以上